

翻
訳

リンハルト・ヴァヴツィーン

一八一五年当時の現実と暮らし

信 岡 資 生 訳

一八一五年当時ドイツの人びとの暮らしはどのようなふうであつたろうか？ 大部分の人びとは、農業に従事するか手工業を営んで生計を立てていた。人びとは身分―封建社会の中で生活していた。そこではすべての身分は国家への奉仕を強いられていたが、貴族は著しい特権を確保していた。広大な騎士領を持つ貴族は実際には税金を支払うことなく、農民とその家族を自分のために働かせ、収穫物と家畜の一部を無償で取り立てる権利を持っていた。農民の他には商工業が大部分の税金を支払った。

ドイツにおける工業化は一八三五年頃になってようやく始まる。ようやくこの頃になって機械（例えばポンプ）や車（たとえば鋸車）を動かすのに馬や人だけでなく蒸気力もだんだん利用するようになる。ようやくこの頃になって素朴な糸車の代わりに紡錘機が、また糸を布地に織るのに手織機の代わりに自動織機がますます頻繁に使

一八一五年当時の現実と暮らし

一八一五年当時の現実と暮らし

われるようになる。ようやく一八三五年の十二月になってドイツで最初の蒸気機関車がイギリスに十年遅れて走り出す。蒸気機関とレールのコンビネーションの結果、輸送コストは下がり、一方では旅行のスピードが増した。都市と田舎の関係を根本的に改め、地方全体の姿を変え、第一次世界大戦までに鉄道敷設だけで、投じた資金の総額を上廻る所得を資本から吸い上げる資本家階級を生んだ基幹産業が始まった (Friedrich-Wilhelm Henning: *Die Industrialisierung in Deutschland, 1800 bis 1914*, Paderborn 1973, S. 165 参照)。

ところでそれまでのドイツの事情はどうであったか？ 一八三五年以前は？ 一八一五年頃のドイツには今日よりもはるかに少ない人間が住んでいた。一平方キロメートル当り平均四十五人、人口密度の高いラインラントで七十人であった。これに比べ今日ではノルトライン・ヴェストファーレンでは同じ面積に約四百五十人が住んでいる。また、人びとは未だ今日ほど都市に集中していなかった。十万人以上の人口を抱える都市はベルリンとハンブルクだけであった。今日では人口十万人以上の都市は約六十二を数える。ヴァイマルのような都市では約八百の家屋に八千人の人間が住んでいた。都市のほぼ九十パーセントは人口三千人に満たず、四十パーセントは千人以下であった (C. Arndt: *Die Einwohnerzahlen niederdeutscher Städte von 1550—1816*, Diss. Hamburg 1947, 参照)。

幾世紀このかた人口は増えていなかった。伝染病、疫病と戦争、乳幼児と分娩時母親の死亡率の高さのため、多くの人間の生命が失われた。何よりも衛生の知識が未だ殆ど無きに等しかった。大ざっぱに見積もって、人口

を維持するだけでも既婚男子は各自一生の間に十人くらいの子どもをつくらなければならなかった勘定になる。

男が結婚するのはたいいてい二十五歳から三十歳の間であった。それくらいにならないと妻を養えるほど稼げなかったのである。女はその代わり嵩張る家事を切り回し、生命の危険を冒して子どもを産んでやった。一人の夫が分娩時母親死亡率の高さのため次々と四人の妻を娶り、それらの妻が二十人もの子どもを産み、そのうちの三人か四人が死なずに育つ間に夫がまた男やもめになっている——こうしたケースも珍しくなかった。

女が結婚する年齢は著しく揺れていた。たとえば文学サロンで有名だったヘンリエッテ・ド・レモスが一七七九年ベルリンでインマヌエル・カントの弟子であり友人でもあったマルクス・ヘルツ博士と結婚したのは十五歳の時であった (Ingeborg Drewitz: Berliner Salons, Gesellschaft und Literatur zwischen Aufklärung und Industriezeitalter. Berlin 1965. 参照)。子どもの時分から知っている隣の子と結婚してみたり、教会への行き帰りや祭礼の時に見初めたり、親が娘を経済上有利な候補者と娶せる約束をしたりした。当人同士が親の知らないところで親しくなるような機会は殆ど皆無に近かった。

当時のモラルは今日よりも禁欲的で、はるかに自由のないものであったにもかかわらず、いったん結婚した男女は、工業化以前のドイツでは、今日のわれわれよりも著しく頻繁に同衾したと推定できる。というのも、実際に働くのは明るい間だけだったからである。暗くなると、大きな責任感に圧迫されることなく自分の時間が持てた。人工の光といえば、大部分ロシアから輸入された牛脂蠟燭か、金持ちなら部屋を明るくしたのは密蠟製の蠟燭だ

一八一五年当時の現実と暮らし

が、それらは高価過ぎるか、さもなければ暗過ぎて仕事にならなかった。農業労働者のような貧乏人は、自分たちの住む荒ら家を明るくするのによく松明を用いた。ラジオやテレビのような受動的な娯楽設備はなかった。読書ができるのは金の有る人が教養のある人に限られた。だから一緒に床に入るしかなかったのである。仕事の後に残された時間はつまり今日ほど計画的に過ごされることはなかったし——買物のような——ちょっとした用向きに費されることもなかった。因に今日では極く少数の勉強中の者とか失業者とか、かなりの範囲の自由業に就いている者のみが自由な自分の時間を持っているだけであるが。おまけに住居と仕事は場所的に離れていなかった。遠距離通勤はなかった。それに職人たちの「二日酔いの月曜休日」がやたらとたくさんあった。これが長い間ツンフト規定に定められていたところさえあった。最初のもは一五五〇年のヴィーンの左官職規定である。ときには仕事をしない二日酔いの月曜休日デインツラオネモンターに更に仕事をしない火曜日が続くこともあった。こうして禁欲と人間の孤独化の傾向のあった市民社会の中へ集団的な官能的快楽の伝統が入りこんだ。それらは先ず徐々に抑えられるか、他へ転換させられた(K. Koehne: Studien zur Geschichte des blauen Montag, Zeitschrift für Sozialwissenschaft, NF 11, 1920, S. 268—287 und 394—414. 参照)。

大部分の小市民は職人で、ツンフトを組織していた。これと並んでツンフトに入らない職人、農民職人、農場職人、職人兵士がいた。たとえば彫版師はツンフトに入らない職人であった。一七八六年ベルリンに生まれたカール・フリードリヒ・フォン・クレーデンは、少年時代の回想記の中で、早く結婚できるように金細工師でなく彫版師になる夢に耽ったことを書いている。「もう二年私は学ばねばならなかった。それから当時行われてい

たツンフトの掟によって六年間職人^{ゲゼル}をつとめた後独立できた。そこで今私は顧客と充分な仕事を得ることができるかどうか、どうすればそれらが得られるかが知りたかった。それには更にまた少なくとも数年を要した。つまり、少なくとも見積もっても十年かかる。何と長いことだろう！これは耐え切れないとはっきりわかった。私は他の手段を考えねばならぬ……もっと早く目標に到達するために……私は彫版術を習おうと決心した」(K. F. v. Klöden: Jugenderinnerungen, Hamburg 1912, S. 203, 1. Auflage 1874 in Berlin.)。

ツンフトは職人相互間の競争を制限する組織であった。たとえば原料仕入れの条件、一つの仕事場が製造できる商品数、それに使用してよい機械器具、製品の質、従業員や経営者が受けていなくてはならない専門教育、経営者や徒弟の両親についてまで規制していた——たとえば農民であってはならなかった。職人たちはまた、いわゆる「私生児」が徒弟となつて働くことをしばしば拒否した。ツンフトは新しい親方が仕事場を開いてよいかどうかを決めた。定員^{ヌーメル・ア・クラウス}制があつて、仕事場の数はツンフト会員が自分たちにとつて有利と見なす限度を越えないようになつていた。 Hoffman の時代には、競争を制限するこの組織が次第に揺らぎ始めている。たとえばプロイセンは一八〇七年営業の自由を採り入れた。とりわけツンフト組織は非手工業組織の経営に追い越された。マッファクトウアー^{マッファクトウアー}工場、家庭の内職を授ける出版社、鉱山などがそれであった。これらは時代が進むにつれ手工業に勝る技術を駆使した。こうしたツンフト的手工業経営でないところで、新しい生産方式が試され、発明が実行に移された。

たとえば多くの鉱山ではもはや人間や動物(馬)が地下水を立て坑からポンプで汲み出すのではなく、それに必
一八一五年当時の現実と暮らし

一八一五年当時の現実と暮らし

要な動力は蒸気機関を使って得られた。一八〇〇年一月一日にジェイムズ・ワットによって改良された蒸気機関の特許保護期間が切れた。この蒸気機関は立て坑を三十六メートル深くすることを可能にした。こうして幾年も経ぬ中にこれまでの人類史上掘り出されたものの合計を上廻る石炭と鉄鉱が試掘されることができた。以前豚飼いだっただけのフランツ・ディンネンダールは余暇に機械の組み立てに熱中していたが、一八〇一年ヴェルデの鉱山会社「ヴォールゲムート」のために一分間に千リットルの水を十八メートルの高さにまで飛ばすことのできる「消火機」を作る委託を受けた。このための資金を与えたのは商人の未亡人ヘレーネ・アマリーエ・クルップである(Horst Mönich: Aufbruch ins Revier. Aufbruch nach Europa. Jubiläumsschrift der Hoesch Aktiengesellschaft. Dortmund 1971.)。

イギリス・フランスに比べるとドイツは当時は未だ発展途上国であった。ドイツを分断し、生産と商品販売の妨げとなっていた関税国境と並ぶ主要問題は金の欠乏であった。製造者、販売者、商人にとり、ともかく何よりも先ず金銭の流動を起こさせる信用制度が無かった。当時はできるだけ現物で支払われた。たとえば粉屋は穀物の製粉に対し報酬として、その穀物の十六分の一を受けた。品物の多くは買わないで、または買うことができないで自分で作った。職人は、たとえば帽子職、馬具職、桶職、皮革職は直接の需要に対してのみ働いた。自分では製造せず、販売によってのみ暮らしを立てた商売は、ただ小さな金物類、手芸装身具、什器、海外輸入品を扱うものだけであった。他のあらゆる製品は商業を通じて売り捌かれることは全くなかった。田舎ではたとえば職業パン屋は殆ど居なかった。パンは自分で、独自のあるいは共同管理の村のパン製造所で焼いた。衣類も

しばしば自分で作った。亜麻とか大麻は繅職人によって賃労働で梳かれたが、それからあとは家でか村の紡ぎ屋で共同で縫われたのであった。

都市の家計も大して変わらなかった。大部分の市民は市壁の内か外のどこかに菜園を所有してせっせとこれを耕作した。自家菜園から採った果実、ザウアー・クラウト、隠元豆その他の菜果類が瓶詰にして貯蔵された。ヒゴロモソウ、パセリ、マンネンロウ、ペパーミントのような香辛料植物が栽培され、生のまま、あるいは乾燥して加工された。しばしば自家製のワインすら絞られた。ベルリンのような大都会では、市民はよく市の門の外にも畑を持った。家畜までも都市の人びとは何頭も飼った。しばしば家の裏に豚や牛の家畜小屋があった。余談ながら今日でもなお、一八七〇年から一九〇〇年の間に出来た古いベルリンの街の裏庭には牛舎が見られ、その一部では第二次世界大戦後まで牛が飼われていたのである。ウィッテンベルクにはラボズィウスのスケッチによると十八世紀から十九世紀の変わり目頃「数人の大学生とそれを上回る数の豚」が居た(Kosmopolitische Wanderungen durch einen Theil Deutschlands. Leipzig 1793, S. 59)。比較的裕福な家庭では年に一回乃至数回豚が屠殺され、鷲鳥、家鴨、鶏も料理された。その場で食べ切れないものは燻製あるいは塩漬けにされた(Margarethe Freudenthal: Gestaltwandel der städtischen und proletarischen Hauswirtschaft unter besonderer Berücksichtigung des Typenwandels von Frau und Familie, vornehmlich in Südwest-Deutschland zwischen 1760 und 1933, 1. Teil [einziger]: von 1760 bis 1910, Phil. Diss. Frankfurt/M. 1933, Würzburg 1934, 参照)。裏庭には当時おびただしい糞の山が積み上がっていたし、一部は家の前にもあった。豚が食餌を求めてその糞の山の中を鼻で探った。天気次

一八二五年当時の現実と暮らし

一八一五年当時の現実と暮らし

第では町中にそれ相応の臭気が漂った。殆ど一年中当時の都市は臭い匂いをぶんぶんさせていたに相違ない。

市民の家庭の内での仕事で、羽根蒲団とか皮張り家具の製造、部分的にはまた屠殺といったような、家の使用人に技術を覚えさせることのできない厄介なことには、短期間専門職を呼び入れ、たとえば羽毛とか馬の毛を自分で調達してあとを彼等の手に委ねた。賃仕事をするのは市民の主婦には禁じられていた。そのため多くの市民の家庭で起った金詰りは、しばしば主婦が家の中で余分に働くことで埋め合わせがつけられたのである。

住み心地には今日ほど重きが置かれなかった。注文は別のことにつけられた。その代わり孤立しないで住んだ。団欒は社会の自明のこととされた。たいていの家は支柱部分に木材を使い、仕切り部分は枝編みと粘土で、数百年前からの設計と古法にのっとって木組み建築風フアツハツエルクに建てられた。屋根には割り石を用いた。こけら板や藁は都市では火災の危険からたいてい禁じられた。建築資材は豊富にあつたし、またそのため安かった。建築に際してはしばしば隣人たちが手伝った。

今日、ヴェーザー河畔のハーメルンのように、市の行政やコンツェルンが、第二次世界大戦がやり残したと、即ち歴史的に成長した町の中心部の大規模な破壊のいわば仕上げをしているとすれば、この犯罪者たちはせめて、今日取り壊させている家屋（デパート一つを建てるために何ダースもの家屋）が当時は高価でなかったと思つて自らを慰めるがよからう。彼等がその代わりに作ってくれる車道、デパート、駐車場などと好い対照である。

筆者は、当時の生活事情を復元し、その変わり様を現在に至るまで批判的に追うことは、たとえば学校の美術教育の政治的課題だと思う。そうすることで、テクノクラシー的非歴史的損得勘定を相殺するため、われわれが自己の願望を自ら表現し達成できる計算を立てる前提が作られる。

金のない者は「一部屋住宅に住み、そこで手仕事をするばかりでなく、家族全員と暮らし、寝る」(L. Formey: Versuch einer medicinischen Topographie von Berlin. Berlin 1796, S. 86)。ところでもちろんのことながら当時の人間の労働はそれほど分化していなかった。したがってきつくなかった。労働の強化もなかった。労働そのものも欲談したり歌ったりしながらできた。生産は手工業経営の中で社交と享楽の気分と下地を殺がぬような仕組みになっていた。一八〇三年ある人が「時折傑作にかかっている期間中は後日受け取る金で酒盛りが続く」と書いてる(J. G. Hoffmann: Das Interesse des Menschen und Bürgers bei den bestehenden Zufufverfassungen. Königsberg 1803, S. 112)。人間が狭いところに寄り集うと——当時の労働事情の下では——社交の気分はいっそう大きくなった。こうした窮屈な居住事情は、個人生活の一定の領域を世間から確保し、プライバシー領域を作る方向に向かう市民道徳ととても相容れなかった。だからこそかのJ・G・ホフマンは、だれが酒盛りの費用を払うかを挙げてみせて酒盛りそのものを排そうとしたのである。また次のようなことを書く著者もいる。「両親はしばしば子どもらが眠っていると思ひこむ。ところが子どもらは起きていて両親のどんな小さな動きも耳にするかもしれないのに。実際またどんな低い物音でも夜薄い壁を通してはっきりと響いた。都会でも狭い路地ではお向かいの、特に未だ初期の激しい、しばしば慎しみを忘れた愛情行為を営む新婚夫婦の部屋で立てられるどんな小さな物音で

一八一五年当時の現実と暮らし

も聞くことができた」(C. G. Salzmann: Über die heimlichen Sünden der Jugend. 4. Auflage, Leipzig 1819, S. 110)。

今日ではモラルはもっと享樂的であるが、しかし実生活は反享樂的になっている。というのも、多くの人びとは労働の負担、住宅事情、生活事情がもとで社交の機会に社交的に振舞う能力が未熟か、あるいは障害を来しているからである。何日も続く酒盛りは稀れである。社交の席に出る客は、やって来たときにもう何時になったら辞去するかをはっきり決めていることが多い。町内の祭りや街頭での祭りは稀れになったため、ラジオやテレビ局の連中が走ってやってきて報道するほどである。彼等は、今日ではますます貴重になった営利的でない享樂を喚起しようと躍起になって報道するが、それというのでも享樂はもはや生産の公共性——企業経営——の中では得られなくなっているからである(たとえば収穫の後)。抜け目のない地方議員たちは、ここに既にイメージ作りのための未開拓市場を探り当てた。地方自治体の公共労働の一部分としての操られた民俗祭り。

E・T・A・ホフマンの生きていた時代に話を戻そう。普通の小市民は当時は住居にごく僅かの家具しか持っていなかった。たいてい大型の長持ちだけであった。この中に食料と衣類を仕舞った。繊維製品の製造には今日と比べはるかに多くの時日を要したので、衣類をたくさん貯えているのは金持ちのしるしであった。今世紀でも一時期自動車がそうであったのに似ている。

衣類は苛性カリと石鹼で洗濯した。流水で洗うため洗濯にはよく川へ行った。晒すには草原に並べた。太陽が「ホワイト・メーカー」であった。未だ洗濯機はなかったし、衛生知識も大してなかった。だから洗濯日も稀れ

であった。衣類の保有量の多寡によって二か月か三か月ごと、あるいはそれよりもっと稀な場合すらあった。貴族、つまり金のある連中でさえ、たとえばゲーテでも、当時はかなり汚れた衣類を着て歩き回ったに相違ない。だが匂いや外見にそれほど構いはしなかったのである。

下水網はなかった。小都市では渡瓶、台所の芥塵、洗い水などはそのまま路上へ棄てられた。台所にはそのための路上へ通じる樋が備わっていた。E・T・A・ホフマンは「黄金の壺」の中で、大学生アンゼルムスがこのような荷を頭から浴びる情景を描写している。大都市では、ホフマンの時代がちょうど糞と芥塵を桶に集め、貧者の中の最たる者に金を与えて手押し車に乗せて町の外へ捨てさせるようになり始めた頃であった。たいてい老婆がこの仕事をさせられた。というのも老人年金保険がなかったからである。家の中に便所など全然ないのが普通であった。ベットの横か下に置いた木の桶か渡瓶が使用された。金のある人びとは家屋内の特別の部屋に桶を置いておくことがあった。農場では家畜小屋の傍に下水溝で繋いだ肥溜めがあった。街路はごく僅かの例外を除いて舗装されていなかったから、しばしば泥濘に覆われ、発酵し、たまに大雨がこれを洗い流した。因に自動車の「泥除^{ゴット・フリースゲル}け」という言葉は、当時の名残りである（訳者注 Kot=泥濘）。

住宅が比較的低廉かつ簡単に建てられたのに、「身分相応に」着るためには多額の金を出さなければならなかった。織物は、自分で作るのではない限り大へん高価で、多くの人間は一生涯にたった一着の上等のスーツ「国家服」が買えるほどであった。だから金持ちでも寝衣を一種のレジャー着にして「一張羅」を大切にとっておいた

一八一五年当時の現実と暮らし

のである。

衣服が当時どれほどの社会的な役割を演じたかは服装条令に明らかである。十八世紀の七〇年代においても未だ領主司教や国王は服装条令を定めた。たとえば一七九九年ヒルデスハイムの司教は「爾今平民並びに農民は、その妻子も含め……衣服に金銀を、特に帽子・頭巾にビロード、絹を、またブラバントものの織りべり、レース、また上質麻布並びに更紗も一切使用すべからず」と定めた (J. H. L. Bergius: Sammlung auserlesener deutscher Landesgesetze, Frankfurt 1781 ff., Band 6, S. 327 f.)。

こうした服装条令には、織物、布地、靴下あるいは珍しい毛皮を輸入して乏しい金を外国へ流出させるのは、出来得る限り封建制の支配階級だけにとどめるようにするという経済的意味があったが、服装条令の社会的意味は身分間の差を視覚的に強調することにあった。というのは、生まれながらにして受け継ぐ権利に支えられて、資本所有だけに支えられるのでない封建制のような支配秩序は、この権利の不平等が絶えず示威されることに頼るものであるからである。こうすることでのみ権利の不平等は当然の性格を保持できる。これに反しわれらがジーメンス家やクルップ家やドナーニ家は、彼等の富を示威的に見せびらかすことなく、まるで一介のサラリーマンであるかのように冴えないふりをして社交的に振る舞っている。資本収益を多かれ少なかれ公然と蕩尽するグンター・ザックスのようなタイプの人間は資本家階級全体の困り者なのである。

ホフマンの生存当時の市民たちは、何しろ未だ封建制秩序の下で暮らしていたのであるから、たいてい衣服に絶対必要以上の金を喜んで出した。むしろ彼等は他のところで儉約した。彼等のデラックス・モードは宮廷スタイルの代表意識を鈍らせる意味も幾分かあった。宮廷でやれることなら殆ど同じようにやれた。さもないれば

質素な、むしろ禁欲的な衣裳をこれ見よがしに着た。事実、画一的な黒が十九世紀のブルジョアジーの色となった。

見すばらしい服装は恥辱とされた。カール・フリードリヒ・フォン・クレーデンは少年時代の回想記の中で世紀の転換直前頃のことを次のように報じている。「私たちの暮らしは貧しくなる一方であった。私は夏は裸足で、身につけているのは麻のズボンとシャツと胴着だけであった。そのうち母は今身にまといているものの他には何も衣裳がないまじになった。いかにこれを清潔にし、しばしばつぎを当てて大事に着たとはいえ、終いにはこの恰好ではもう日曜日に教会へ行くわけにはいかなかった。そこで母はとうとうそれまで持ち続けたこの最後の楽しみ、この最後の慰めまでも諦めざるを得なくなった。唯一の気晴らしに母はそれから時折ゾフィー教会の墓地に行き、末っ子を腕に抱いてお墓に腰をかけることにした。私たち上の子は母の回りで遊び、チョウを捕えた」(Jugenderinnerungen, Hamburg 1912, Seite 45)。

確かに衣服は実に高かったが、しかし長もちがした。一生もつこともあった。そうなると大部分の金、稼ぎの四分の三近くは飲食に費やされた。中世以来、特に一六五〇年以來実質賃金は下がり続けた。人びとの暮らしは経済的には中世より悪かった。このことは食卓に上った肉から読み取れる。ドイツでは中世後期には未だ一年間に人口一人当たり百キログラム以上の肉が食べられたと推定される。ホフマンの時代にはこれに反し年間一人当たり僅か二十キログラムほどであった(Wilhelm Abel, Wandlungen des Fleischverbrauchs und der Fleischversorgung in Deutschland seit dem aussehenden Mittelalter, in: Berichte über Landwirtschaft, Nr. 22, 1937, S. 444 f. 参照)。

一八一五年当時の現実と暮らし

一八一五年当時の現実と暮らし

われわれが今日、また中世の昔に戻って、値段が高くて蛋白質の多い、濃厚な食物を口にしているのに反し、当時はビールのスープ、碾き割り麦か小麦粉のスープであった。穀物、野菜、果実類、キャベツ、じゃがいもなど炭水化物の多い食物ばかりが献立表に載った。多くの小作農民は支配階級に搾取され、空腹を抱えていた。たくさんの上納を強いられたのである。その当時バイエルンに住むルムフォルト伯が新しいスープを考案し、彼の名が付けられた。その調理法によれば材料は次の通り。「玉麦二分の一ポンド、えんどう二分の一ポンド、じゃがいも二ポンド、上等白パンの薄片少々、塩、薄いビール・ワイン酢もしくは酸っぱくなったビール二十四マース、水約五百六十マース」(E. Larsen: Graf Rumford—ein Amerikaner in München, 1961, S. 91f)。

われわれは今日スープを専ら前菜として飲んでいる。当時スープは「一般人」にとっては普段の暖い御馳走であった。パンと並んでキャベツも献立を賑わす役割を果たした。穀類は貧民にとって一七七〇年頃からあまりにも高価なものとなったので、白キャベツを生のままか、あるいは酢漬けにして食べた。白キャベツは一ヘクタール当たり二百五十ドッペルツェントナーの収穫があり、ザウアー・クラウトに加工されると五千ログラムカロリーになる。これに比し、一ヘクタールの土地に穀類を植えて付けても八ドッペルツェントナーの収穫しか挙げられず、これはおよそ二千ログラムカロリーでしかない (Friedrich-Wilhelm Henning: Die Industrialisierung in Deutschland, 1800 bis 1914, Paderborn 1973, S. 52. 参照)。当時からドイツ人は、今もなおたとえばアメリカ合衆国でザウアー・クラウト食いの評判を立てられている。これは当時多勢の人間が食うに困ってアメリカへ移住したことも関係がある。

水はたいいてい自分の家の井戸から汲んだものを飲んだ。お茶はこれに対し贅沢品あるいは薬とされた。ただし

沿岸部ではお茶は比較的一般に飲用された。酔うには強いビールや火酒が飲まれた。

コーヒーの消費についてはヨハン・クリューニッツが数百巻に及ぶ「経済百科事典」の中で書いている。

「コーヒーの（課税）負担の増加によってその消費が著しく減じたとは私は思わない。貧しい人びとはみんな、殊にコーヒーを飲むのをその高騰によって控えねばならなくなった人たちまで——乞食、日雇労働者、兵士、職人——みんな以前と変わりなくコーヒーを飲んでいるのは否定できない。そしてたとえそこしにコーヒーを家庭から締め出す二、三の頑固者が居るとしても、早合点は禁物。外国産のコーヒーの消費を幾らかでも減らしているのは、幾種類もの国内産コーヒーを発明するコーヒー党の努力なのである。一般のコーヒー好き、それにたぶん貴人も、えんどう、どんぐり、大麦、乾燥人参、その他のものを炒って、これを本物のコーヒーと多かれ少なかれ混ぜる、こうして以前と変わらずブラック・タイムが保たれるという次第」(Band 32, Berlin 1784, S. 119)。

職人と並んで当時の都市像にとって重きをなした小市民層（実際には未だ大ブルジョアジーや階級的性格を持つプロレタリアートは存在しなかった）には、多数の封建制行政機関の職員が居た。諸侯はそれぞれ自前の官僚を抱えていた。官吏は貴族に経済的に依存し、殆ど独自の自我意識を発展させることはできなかった。ドイツでは、たとえばイギリス以上に貴族はこの階級との個人的関係を避けていた。

小市民の中のごく少数の者だけが、自分たちの押し込められている知的蒙昧を脱することに成功した。牧師の職や家庭教師の口がこれら少数者の何人かに食って行ける可能性を提供した。たとえばE・T・A・ホフマンは数年にわたって市民の家庭で音楽の家庭教師をしたが、それらの家の主人は、商工業顧問官、公国官房長官、枢

一八一五年当時の現実と暮らし

密顧問官、宮廷司法官などであったり、貴族であったりした。

こうしたアルバイトは重要な副産物をもたらした。即ちインテリに、古い封建社会の行政エリートに属する上流小市民の社会的環境を具に覗きこませたのである。ここでホフマンは、そこでの暮らしぶりや考え方を共に教えられた。必然的に彼は、世間を憚ることなので表に出ない動機や事件を知ることになった。彼の生業は、彼の文学的産物に影響を与える一つの実益を意味した。無意識の中に小市民はこうした文学への転化の条件をますます強めていった。なぜなら、これら教師や芸術家の報酬は悪かったからである。社会的には彼等は、尊敬されたというよりもしばしば大目に見られていた。確かに彼等の知識は頼りにされた。人びとは教えてもらった知識で身を飾り、娘にピアノの弾きかたを覚えさせて結婚のチャンスをいっそう良くしたがった。しかし経済的にはこうした連中は零であった。つまり、娘にとってはむしろ危険を意味した。そこで警戒された。このようにして芸術家や家庭教師が雇主に同化し、身を固め、肥満していくのを金持ちの小市民自身で阻んだのである。これらがこれら有力者層との險惡な關係を生じさせた本当の空氣であった。

名士連は、生活様式の豪華さではとても貴族にかなわないのであれば、せめて知識と教養で自分を良く見せようとした。この格上げ志向は、無学者者を輕蔑することで更に支えられた。後者に入るのは農民、稼ぎの悪い職人、また当然ながら使用人や日雇いであり、彼等は教育に金を払う余裕がなかったか、払う意志がなかった。一七九三年フォン・アルヒェンホルツなる人がハンブルクで発行された歴史・政治雜誌「ミネルヴァ」に「下級階層、即ち職人と農民はおしなべていずこにても人間とは言い難し」と書いた (Heft 5, 1793, S. 379)。

ここでは職人と農民に独自の文化と独自の伝統・慣習のあることが市民の立場から無難作に否認されている。

市民教育の中では百姓という言葉は長い間罵言であった。幼児だけが「お百姓する」^{「おイヌヒツ・ヤツ」}（訳者注・げっぶをもらす）権

利があった。市民教育の父の一人であるJ・H・カンペは一八〇七年にこう書いた。「百姓という語は比喩的にさつな野人の意味に解される。『彼は粗野な百姓である、全くの百姓だ。』」（Joachim Heinrich Campe, Wörterbuch der deutschen Sprache, 5 Bände, Braunschweig 1807–1811; Neudruck: Hildesheim, New York 1969）。テュービンゲン大学の国家学の教授であり、ドイツ統一運動の先駆者の一人であったフリードリヒ・リスト（一七八九–一八四〇）は、「『百姓身分』なる語は連想される卑賤・貧困の概念の故を以ってすべからく『抹殺』さるべきなり」と一八四二年に書いている（Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung, Schriften, Band 5, S. T. 478, Anm. 1）。因に今日では農民は営農家と称しているが、自らの文化的また政治的伝統についてはもはや殆ど、あるいは全く知るところがない。

一八一五年当時ドイツでは未だ七十パーセント以上の人間が田舎に住んでいた。たいてい祖父母、両親、子どもの大家族で一つ屋根の下に暮らした。農家では三世代が共同生活することは農業を営む上からもぜひ必要であった。そうすることで農業生産と幼児の時折の授乳や老人家族の世話がその中で最もうまく均り合いがとれたのである（P. von Blanckenburg: Einführung in die Agrarsoziologie, Stuttgart 1962, S. 96）。子どもはこうした農家では町の小市民の許でとは違った風に育てられた。彼等は幼い時からもう共に働かされた。このことが彼等の権利

一八一五年当時の現実と暮らし

一八一五年当時の現実と暮らし

の増大を意味したことは否定できない。農民はそのためけっして小市民のように家長にならなかった。

歴史年表

年	経済・技術・科学	政治	戦争・革命	文化・芸術
一七八九	ドイツ帝国では二三〇〇万人の人口の中、八〇％が地方に住む	フランス国民議会が人権宣言を行う	フランス革命 フランスの人民が絶対王制の支配及び貴族と教会の後見からの解放のために戦う	ゲーテの戯曲「タッソー」
一七九〇	英国に最初の蒸気の力を利用した庄延工場	フランスにジャコバン党成立		マフラー付き燕尾服流行
一七九一	ピネル狂気を病気と見立てる	フランス 鎖禁錮刑をガレー禁錮刑に改める		モーツァルトのオペラ「魔笛」
一七九二	マードック燈用ガスを発明	フランスで教会外結婚	一七九二―九五 革命戦争 プロイセン、オーストリア、オランダ、英国、スペインが革命フランスと戦う	ハンブルク通信に結婚広告
一七九三	Ch.F. シュプレングル昆虫受粉を発見	ヨーロッパ最後の魔女焚刑（ポーゼン）		ウィーン 政治的秘密警察が信書の秘密を犯す
一七九四	パリに初の工学校	フランス 植民地と奴隷制廃止		ヘルダーラインの長編「ヒュペーリオン」
一七九五	英国で最初の鉄道馬車	執政官政府の発足でフランス革命の終焉		カント「永遠の平和のため」
一七九六	ジェンナーによる種痘		バベフの革命の共産主義	ドイツ 毎年六〇万人が痘

一七九七	一千メートルの上空から落下傘降下（ガルネリーン）	フランス オーストリア からベルギーとロンバルジアの割譲
一七九八	マルサス説 人口の増加は食糧よりも速い	ナポレオン エジプト入り
一七九九	ベルリীন最初の蒸気機関	ナポレオン 執政官政府を倒し独裁者となる
一八〇〇	ドイツの大学に学ぶ学生約七千人	旧革命家等フランスでナポレオンに対し反乱して失敗
一八〇一	（光学）干渉の原理の発見 長足の進歩	フランス ライン左岸を得る（リュネヴィル講和）
一八〇二	ドイツ最初の甜菜糖製糖工場	フランス 植民地制度と奴隷の復活
一八〇三	アペール食料の瓶詰に成功	新しい州編成 百十二のドイツの小国解消
一八〇四	最初の軌条用蒸気機関車（坑内鉄道）	ナポレオン皇帝戴冠

的継続の挫折

一七九六—一八一五 ナポレオン戦争
国民感情の覚醒に支えられてナポレオンはフランス民族の防衛戦争を侵略戦争に変える。イタリアからスカンジナビア、スペインからポランド、更にエジプトまで彼は勝利の軍を進める。

瘡にかかる	ドイツで最後の熊が射止められる（フィヒテルゲビルゲ）
ベートーヴェンのソナタ「悲愴」	シュライアーマッハー「宗教について」（宗教は無限なるものへの意識）
シラー「マライア・ステュアート」	ペスタロッツィー「ゲルトルートの子どもの育てかた」
ベートーヴェン「第三シンフォニー」（英雄）	フランス革命音楽の影響
シラー「ヴィルヘルム・テール」	

一八一五年当時の現実と暮らし

年	経済・技術・科学	政 治	戦 争・革 命	文 化・芸 術
一八〇五	ハーネマン同種療法を理論付ける	ウィーン 饑饉暴動と労働者の一揆の鎮圧	英国によるフランス艦隊殲滅（一八〇五トラファルガー）によりナポレオンの世界的植民地戦争の夢が潰える。ロシア攻略は失敗し（モスコー一八一二）、挙句に征服民族の蜂起（ライプツィヒ一八一三、オーストリア、プロイセン、ロシアの同盟軍がナポレオンに勝利、死傷者一〇万）とフランスの完全な敗北（ウオーターロー一八一五）をもたらす。	ロンドン 刑事警察の前身としての警察探偵
一八〇六	海上封鎖 ナポレオン英 国との通商を禁じる	十六のドイツの諸侯がナポレオンと同盟（ライン同盟）		クライスト「こわれ甕」
一八〇七	戦争被害 プロイセンの家畜数が三分の一減少	プロイセン 農民解放、職業の自由		フィヒテの反ナポレオン「ドイツ国民に告ぐ」
一八〇八	アメリカ合衆国で奴隷養成用の黒人農場	プロイセンの都市条令 有産市民階級の自治		C・D・フリードリヒ 絵画「山岳の十字架」
一八〇九	最初の電信（ゼンメリング）	フランスとバイエルンに 対するチロルの民族戦争		シェンケンドルフの歌「私の考える自由」
一八一〇	ケーニヒ高速印刷機を発売	チロルの農民指導者アン ドレーアス・ホーファー がフランス兵に射殺さる		ベートーヴェン ゲーテの エグモントのための音楽
一八一一	プロイセン ツンフトと 非自由民の賦役を廃止			モットーフケーのメルヒエ ン「ウンディーネ」
一八一二	エッセン クルップが鋳 鋼工場を設立	プロイセン ユダヤ人の 同権、生徒にアビトゥー ア		グリムのメルヒエン

一八二三	ドライス最初の二輪車を組み立てる（搬車）	機械破壊労働者が英国で死刑の判決を受く		シャミットソーの小説「ペーター・シュレミール」
一八二四	ステイブンソンが坑内鉄道用の汽車を組み立てる	プロイセンが国民皆兵を採用		E・T・A・ホフマン「カロー風幻想曲」
一八二五	約八年周期で英国に経済危機	ウィーン会議 君主等が革命運動に結束して対抗		アイヒェンドルフの「長編「予感と現在」の刊行
一八二六	ヴァルデンブルク／シュレージエン ドイツ最初の亜麻紡績機械工場	プロイセン 愛国的新聞「ライニッツェ・メルクーア」を発禁		
一八二七	凶作 ドイツに大饑饉		ヴァルトブルクの祭典 ブルシエンシャフトが反動的な書物を焼く	E・T・A・ホフマンの作品集「夜想曲」
一八二八	蒸気船がベルリンとポツダム間を走る	プロイセン内国関税を廃止、高額通過関税	イエーナ ブルシエンシヤフトドイツ統一を主張	フランツ・シュューベルト自由音楽家としてヴィーンに住む
一八二九	北ドイツ 農業危機、価格下落、失業	カールスバートの決議でブルシエンシャフトの禁止、検閲	ブルシエンシャフトの組合員ザントが刑事コツェブーを暗殺	プロイセン ゲーテの「エグモント」とシラーの「群盗」を発禁
一八三〇	銑鉄生産 ドイツ九万トン、英国三十七万トン	オーストリアとプロイセン憲法の約束を撤回	ドレーズデン ブルシエンシャフト秘密に集会、	プロイセンで体操禁止

一八一五年当時の現実と暮らし

一八一五年当時の現実と暮らし

年	経済・技術・科学	政	治	戦 争・革 命	文 化・芸 術
一八二二	光学 フレスネルの光振動説	国内治安に関する列国会議		カモフラージュ スイス ドイツ人の過激派がドイツ祕密結社を設立	ベルリーンに公衆便所ただ一か所
一八三二	プロイセン 最初の道路建設株式会社設立される				E・T・A・ホフマンの「蚤の親方」差し押さえ

訳者あとがき

本稿は „Der Automaten-Mensch. E. T. A. Hoffmanns Erzählung vom) Sandmann (Mit Bildern aus Alltag & Wahnsinn. Auseinandergenommen und zusammengestellt von Lienhard Wawrzyn. Verlag Klaus Wagenbach, Berlin 1976“ の第二章 (S. 35—55) の全訳である。ロマン派の鬼才ホフマンの活躍した時代背景を社会的に考察するに際し、参考に値する資料の一つであると思い、敢えてここに訳出してみた。

一読して明らかのように、ここに描述されているのは一九世紀初頭のドイツの社会の後進性である。怪奇と幻想を追うロマン主義を育てたのは、フランス革命に刺激された自由・平等・兄弟愛の市民社会の構想とこの社会が置かれた現実の情況とのギャップからくる危機意識であった。ロマン派の詩人にとっては、遅れた社会に無自覚的に同調する社会一般の——個人でなく——平均意識こそ問題であった。その意味ではまた彼等のいう自己

実現は反社会的とならざるを得なかった。著者の意図はこうした点を明らかにしようとするものである。一つの政治的立場からの、丹念な考証に支えられたユニークでいささか大胆な筆致と共に注目を惹くものといえよう。